

2009 年 8 月 22 日
フロイトを読む会（第 14 回）
報告者：木村 祐治

「トーテムとタブー——未開人の心の生活と神経症者の心の生活における若干の一致点」（1913 年）

参考：「「未開人の心の生活と神経症者の心の生活における若干の一致点」への導入の文章」（1912 年）（『全集』Vol.12、pp.285-288）

【全体の構成】

まえがき

I インセストの忌避

II タブーと感情の蠢きの両価性

III アニミズム、呪術そして思考の万能

IV 幼児期におけるトーテミズムの回帰→フロイト自身も高評価（『全集』Vol.12、p.359）

○社会人類学への寄与

○原始群族と原父殺害についての仮説

→社会的・文化的制度の起源

●宗教、倫理、社会、芸術…エディプスコンプレクスに始まる

→『モーセという男と一神教』

●感情の両価性（愛と憎悪）…文化形成の根本

●個人の心と集団の心

→『集団心理学と自我分析』

●（強迫）神経症との類比

（『全集』Vol.12、pp.200-202）

【内容】

まえがき

○タブー…現在でもわたしたちの内部で存続

問題の確実な解決をもたらす試み

○トーテミズム…新たな形式に取って代わられた宗教的・社会的制度

精神分析的考察の限界の範囲内

→トーテミズムがこどもの成長において再び見出されることを暗示するいくつかの特徴から、トーテミズム本来の意味を洞察する試み

I インセストの忌避…神経症との共通点

○（半）未開人

◇遠い昔の人間の直接の子孫や生まれ変わりとして見出される

◇現代人の発展の前段階が保存されている

→「自然民族の心理」（民俗学）と「神経症者の心理」（精神分析）との比較

○オーストラリア先住民のトーテミズム

※宗教的・社会的制度は持たない

◇各部族→諸氏族（クラン）…トーテムによって名付けられる

◇トーテム

氏族全体と特別な関係にある動植物、自然の力（雨、水 etc）

氏族の祖先、守護霊、保護者

→子孫を危険から守る

◇トーテムに属する者の義務→違反した場合には、罰が与えられる

トーテムを殺してはならない

トーテム動物の肉、トーテムが提供する享樂を節制する

◇トーテムへの所属

あらゆる社会的義務の基本

部族に属することよりも重要。血族関係をも凌駕。

○「族外婚」の掟…集団的インセスト防止のための手段

※どのようにしてトーテミズムに組み込まれたのかは不明

「同一トーテムに属する者は、性的関係を持つてはならず、よって結婚してはならない」

◇男性は、自分自身の氏族の全女性（血縁関係にない女性を含む）との性的合一が不可能に

∴全女性が血縁者と同様の扱いを受ける

◇同一トーテムに由来するすべての者は血縁関係（家族）にある

→血縁が薄くても、性的合一の絶対的な障害となる

○「義母回避」…義母と義理の息子との関係

義母…義理の息子にとって、インセストの誘惑者として現れる

○インセスト忌避の心的幼児性…神経症者との一致

神経症における発達障害と退行→幼児の性的心理状況にとらわれている状態

インセスト願望に支配された親との関係が中核的コンプレクス

II タブーと感情の歪みの両面性…情愛⇄敵愾心

○「タブー」…ポリネシア語

「神聖な」「聖別された」

「不気味な」「危険な」「禁じられた」「不浄な」

→「敬遠」のニュアンス

禁令・制約

「神聖な忌避」

○タブーによる制約

×宗教的・道徳的禁令

→「おのずと」禁じられる…根拠、起源が不明

○タブーの根本にある「理論」

「ある特定の人やモノは、危険な力を持っている。その力を持っている対象と接触することで、その力は伝染病のように広がっていく。それを防ぐため、禁令が必要になる」

○W.ヴァント

〈タブーの源泉〉

原始的で、最も永続的な人間の欲動が湧き出るところ、つまり魔的な力の作用に対する恐れに端を発する。

○精神分析から見たタブー…強迫神経症との関係

※タブー≠神経症

＝社会的に形成されたもの

◇個人的にタブーの禁令を作りだし、それに従う人

→「強迫症者」「タブー症(?)」

◇強迫的禁令とタブーの共通点

▽禁令の動機、由来が不明

→命令の無動機性

▽命令の遷移可能性と禁じられたものを通しての伝染の危険

→「接触の禁令」「接触不安」

▽内的強制による命令の強化

▽禁令を出発点とした命令の惹起

○タブーの禁令に対する態度…両価的

無意識において禁令を犯すことを欲しながら、そのことを恐れる

恐れ>快

○最も古く、重要なタブーの禁令…トーテミズムの根本命令

◇トーテム動物を殺してはならない

◇同一トーテムに属する異性との性交を避けなければならない

→幼児の欲望生活の結節点

神経症の核心

○接触の禁令

◇接触…制圧一人やモノを意のままにする一の始まり

→支配者のタブー→今日の宮廷儀礼

▽王「に」触れること…危険

▽王「が」触れること…救済

◇王の保護

王の監視…王の「よき意図」、「良心」への不信が根底に

「臣民を幸せにできぬ君主は去れ」

cf.)「信者を幸せにできぬ神は去れ」

(「モーセという男と一神教」『全集』Vol.22、p.141)

○死者のタブー

情愛と喪の悲しみ⇔潜在的な敵愾心

○タブーと良心…禁令の背後に慾あり

◇特定の欲望の棄却→良心

◇良心の命令としてのタブー

タブーを犯すことによる罪責感情…由来不明

III アニミズム、呪術そして思考の万能

狭義のアニミズム…魂の観念に関する学説

広義のアニミズム…精神的実在一般についての学説

○三つの思考体系…「万能」をどこに見出すか

◇個々の現象を説明するのみならず、世界全体を一つの連関として、ある観点から把握することを可能に

◇世界の存在をくまなく解明

▽アニミズム的（神話的）世界観→人間

最も首尾一貫し、徹底的

心理理論

▽宗教的世界観→万能の一部を神に

▽科学的世界観→「人間の万能」の否定

死、あらゆる自然的必然性の支配に服す

○呪術…アニミズムの技法のうち、ヨリ根源的・根本的なもの

◇人間の意思による自然運行の支配（雨乞い etc）

◇敵や危険からの保護

◇敵を傷つける力の付与 etc

「現実の連関を観念的連関と取り違える」（E.B.タイラー）

○呪術の動機＝人間の欲望

自らが欲することを呪術的行なう

→幼児の心的諸条件

○「思考の万能」…「思い浮かべたことがすべて実現してしまう!!」

◇神経症者の初歩的強迫行為…呪術的性質を持つ

◇アニミズム…「思考の万能」の一部を「霊」＝神々に譲る

→宗教の形成

IV 幼児期におけるトーテミズムの回帰

トーテミズムが先か？ 族外婚が先か？ → トーテミズムが先

○幼児と動物＝原始人と動物

◇動物恐怖症…トーテミズムの特徴の回帰

▽父親への両価的態度→動物への遷移 ※エディプスコンプレクス

▽トーテム動物との同一化、トーテム動物への両価的態度

◇トーテム禁令と幼児の根源的欲望との合致

▽父親の代替としてのトーテム動物

▽父親との契約＝トーテミズム→宗教の起源

父親→こども…保護、配慮、愛護

こども→父親…父親＝トーテム動物の生命の尊重

神…根本的に高められた父親

○原父殺害

息子（兄弟）たち

「父親打倒」の点では一致

女性たちをめぐってはライヴァル関係

→共存のために、インセストの忌避が必要に